成人期抑うつ症状に及ぼす小児期体験、神経症的特質、ライフイベントの多因子相互作用

井上　猛，高江洲義和，小野泰之，大野浩太郎

東京医科大学 精神医学分野

【研究の背景】

虐待、低養育、過保護などの否定的な小児期体験は成人期の神経症的特質、ストレス、抑うつ症状、うつ病発症に影響することが報告されてきた（Nakai et al. 2014）。最近、神経症的特質と成人期ストレスが交互作用してうつ病が発症することが明らかになった（Kendler et al. 2004）。うつ症状、うつ病発症には小児期体験、ストレス、パーソナリティ特性などの多因子が影響することが多くの研究で報告されてきたが、これら多因子の相互作用はまだ十分には解明されていない。

【目　　的】

本研究では、一般成人において、小児期の否定的な体験（虐待、低養育、過保護）が成人期の神経症的特質に対する影響を介して、成人期のストレス、抑うつ症状に影響するという仮説を立てて、共分散構造分析によって仮説を検証した。

【方　　法】

一般募集し、同意が得られた成人 413 名（男性 221 名、女性 192 名、42.3±12.0 歳）を対象に以下の自記式質問紙による調査を実施した。

①Patient Health Questionnaire-9（PHQ-9）日本語版：4 件法 9 項目のうつ症状評価尺度（Muramatsu et al. 2007）

②Life Experiences Survey（LES）：57 項目のライフイベントについて過去 1 年間の経験の有無と、それらの心理的に否定的な影響、あるいは肯定的な影響の強度を 7 件法（−3～＋3）で評価し、肯定的ライフイベント評価得点と否定的ライフイベント評価得点をそれぞれ計算する（Sarason et al.1978）。

③Parental Bonding Instrument（PBI）日本語版：子供の頃の両親の養育態度を思い出して、25 項目を 4 件法で評価する。「養護」「過保護」の 2 因子からなる（Kitamura et al.,1993）。

④Child Abuse and Trauma Scale（CATS）日本語版：子供の頃の虐待的養育環境を思い出して、38 項目を 5 件法で評価する（Sanders and Becker-Lausen ,1995）。ネグレクト、性的虐待、罰の下位尺度がある（田辺 1996）。

⑤EPQ（Eysenck Personality Questionnaire）-R 短縮版の neuroticism（神経症的特質）：辻らが作成した EPQ 日本語版（甲南女子大学研究紀要 26:59-80,1989）より EPQ 短縮版の neuroticism12 項目（Eysenck et al. 1985）を抽出した。はい、いいえの 2 件法で評価する。

統計学的解析は、MPlus7.3（Muthén & Muthén）を用いて共分散構造分析により解析した。モデルの適合度は Root Mean Square Error of Approximation（RMSEA <0.08 が許容範囲）と Comparative Fit Index （CFI >0.95 が許容範囲）で評価した。

【結　　果】

共分散構造分析により、小児期の虐待、両親の過保護、両親の低養育が神経症的特質、否定的ライフイベント評価、成人期の抑うつ症状に及ぼす効果をそれぞれ別のモデル（合計 3 つのモデル）で検討した。モデルの適合度は良好であった。

これらの小児期体験はいずれも成人期の神経症的特質を強め、成人期の抑うつ症状を増強した。一方、神経症的特質は否定的ライフイベント評価を増強し、成人期の抑うつ症状を増強した。両親の過保護と両親の低養育の成人期の抑うつ症状に対する直接的な効果は有意ではなく、神経症的特質を介した間接効果が有意であった。一方、小児期の虐待の成人期の抑うつ症状に対する効果は、直接効果と神経症的特質を介した間接効果のいずれも有意であった。これらの小児期体験の抑うつ症状に及ぼす間接効果は、神経症的特質と否定的ライフイベント評価を介した効果よりは、神経症的特質のみを介した効果のほうが大きかった。

【考　　察】

本研究は、小児期の体験（虐待、過保護、低養育）が神経症的特質の増強を介して、ストレス感受性と成人期抑うつ症状を増強することを明らかにした。すなわち、小児期体験の成人期抑うつ症状に対する影響において、神経症的特質が媒介因子となっていることが明らかになったが、この媒介作用においてはストレス感受性を介した作用よりは介さない作用のほうが大きな寄与を示した。これらの結果は、様々な否定的小児期体験が一般成人の抑うつ症状に大きな影響を与えていることを示すとともに、小児期体験の影響を評価するためには神経症的特質の評価に重点を置くことが重要であることを示唆している。今後、うつ病の発症、経過、治療反応あるいは抑うつ症状出現における小児期体験、神経症的特質の役割をさらに検討していきたい。

【臨床的意義・臨床への貢献度】

小児期の否定的な体験が、神経症的特質を介して、成人期うつ症状と出来事の否定的評価（ストレス感受性）に及ぼす間接効果が明らかになった。いいかえると、否定的小児期体験が成人期うつ症状とストレス感受性に及ぼす長期的影響において、神経症的特質が媒介要因となっていることが示唆される。

【参考・引用文献】

Nakai Y, Inoue T, Toda H, Toyomaki A, Nakato Y, Nakagawa S, Kitaichi Y, Kameyama R, Hayashishita Y, Wakatsuki Y, Oba K, Tanabe H, Kusumi I: The influence of childhood abuse, adult stressful life events and temperaments on depressive symptoms in the nonclinical general adult population. J Affect Disord 158, 101-107, 2014.

Kendler KS, Kuhn J, Prescott CA: The interrelationship of neuroticism, sex, and stressful life events in the prediction of episodes of major depression. Am J Psychiatry 161, 631-636, 2004.